

名古屋博物館本『和名類聚抄』の傍訓から

——当代の辞書への改編を検証する——

樋野 幸男

(二〇〇四年一〇月二〇日受理)

The Notes in Kana in the Wamyōruijushō at the Nagoya City Museum

Yukio HINO

- 1 はじめに—本稿の目的—
- 2 博物館本の〈傍訓〉と『和名抄』諸本の〈和名〉
- 3 〈和名〉から〈傍訓〉へ
 - 3・1 『日葡辞書』および当代の文献との比較
 - 3・2 〈傍訓〉にみえる中世的要素の確認
- 4 おわりに—博物館本の性格—

1 本稿は、名古屋博物館所蔵の『和名類聚抄』（以下「博物館本」とよぶ）について、その文献的性格を検討することを目的とする。また、国語辞書の歴史における位置づけにも言及する。筆者は、樋野（一九九五）において、博物館本の〈傍訓〉と『和名抄』諸本の〈和名〉との関係を考察するための基本的な資料を提示した。それに基づいて、論述する^{注1}。

博物館本は『和名抄』諸本の標出漢字列に施された^{注2}註文を排除して、そこに掲げられた〈和名〉^{注3}を〈傍訓〉として標出漢字列の右傍（左傍／右下）へ片仮名により標示する形式をとる。この形式は、中世に普及した『節用集』や『下学集』に同然といえる。そして、この改編を理解するには、つぎの二つ

の可能性が想定される^{注4}。

- (x) 『和名抄』との関係から ↓ 〈傍訓〉は付加的な要素
- (y) 『節用集』との関係から ↓ 〈傍訓〉は中心的な要素

博物館本は、和名抄諸本との関係を重視する(x)の視点（出自を重視）によれば、「総目録ないし索引^{注5}」と把握することになり、節用集との関係を重んずる(y)の視点（実態を重視）からは、時代の要請に対応するため、あらたな辞書へと脱皮したと解釈できる。かりに(x)ならば、和名を標示することは〈総目録ないし索引〉として補助的な機能しか持たないはずで、和名をあえて改変したりする必要はない。和名を標示せずとも支障はなく、改変すれば、かえって不都合が生じてしまう。一方、(y)だとすると、傍訓が自立的に機能するために和名を積極的に提示する必要が生じてくる。その際、実用的な辞書としては、さらにその改編当時の言語を反映した形へと和名を改訂せねばならない。そこで、博物館本の傍訓と和名抄諸本の和名との関係を解明することが課題となる。

筆者は、樋野（一九九三）において『博物館本は、標出漢字列と註文とが連動する形式で、改訂の手が加えられている』と解釈すべき事実を確認した。

この改訂がいつごろ――編纂からさほど降らない時期か、あるいは中世のある時期か――行なわれたかは不明であるが、この事実と《十巻本と二十巻本の中間に位置する》とする立場とはうまく噛み合わない。少なくとも《中間に位置する伝本》に由来するとしても、《ある程度の改訂が施されている》と考える方が合理的である。

2 本稿では具体的な事例を採り上げながら、傍訓を検証することを試みる。そして、つぎの仮説を確認する。

博物館本と和名抄諸本との間で対応する標出漢字列に与えられた傍訓と和名とを照合すると、博物館本の傍訓の中には和名抄成立の時期には見られない中世的性格を帯びた日本語に改変された事例がしばしば存在する。

まず、傍訓と和名との関係を分類すると、つぎの六つになる。^{注6}

- I. 傍訓と和名が、ともにない。
- II. 傍訓(1)があり、和名がない。
- III. 和名(1→2)があり、傍訓がない。
- IV. 傍訓(1)と和名(1)が、一致する。
- V. 傍訓(1)と和名(2→3)が、和名のいずれかと一致する。
- VI. 傍訓(1)と和名(1→2)が、(和名のいずれとも)一致しない。

この分類に従って、傍訓と和名との関係を報告する。^{注7}
さて、それぞれの分類に所属する事例がどのような言語的背景に起因するかを考えると、およそ以下のように推測できる。

I 類【傍訓と和名がともにない】^{注8}

(a₁) 成立期(Ⅱ和名抄成立の時期)から改編期(Ⅱ博物館本への改編の時期)にかけて、対応する日本語(Ⅱ標出漢字列に対応する《日本語の単語》)が自明であった。^{注9}

(b₁) 成立期から改編期にかけて、対応する日本語が存しなかった。

II 類【傍訓があり、和名がない】

- (a₁) 成立期から改編期にかけて、対応する日本語が自明であった。
- (b₁) 成立期には対応する日本語が存しなかったが、改編期までに字音語形が対応する日本語として定着していた。

III 類【和名があり、傍訓がない】

- (c₁) 成立期には対応する日本語が存したが、改編期には死語^{注10}となっており、一般庶民には理解不能であった。

IV 類【傍訓と和名が一致する】

- (a₂) 成立期から改編期にかけて、対応する日本語が死語とはならず、語形にも変化が生じなかった。
- (c₂) 成立期には対応する日本語が存したが、改編期には死語となっておりながらも、一般庶民にも理解可能であった。

V・VI 類【傍訓と和名が一致しない】^{注11}

- (d₁) 成立期から改編期にかけて、対応する日本語の形態に変化が生じた。
 - (d₂) 成立期から改編期にかけて、対応する日本語が交替した。
- 以上、各類の典型的な事例について解釈を提示した(すべての事例を網羅するものではない)。このうちII類(b₁)およびV・VI類(d₁)(d₂)は本稿にとって示唆的な事例といえる。なかんずく(d₂)は単語の交替であり、高度に意図的な行為であって、不注意では起こり得ない変更である。この事例からは改編への意志が確実に読み取れる。

3・1 これから、右の分類にしたがって具体的に考察する。

さて、博物館本が一五六六(永禄九)年に書写された事実は動かし難いが、その形式(標出漢字列に対する傍訓の添付)への改編の時期は明確ではない。本稿では《中世以降のある時期(Ⅱ「当代」である)》との仮説のもとに、傍訓

の性格を検証する。

ところで、当代の口頭言語を反映すると考えられる文献は多く現存するが、便宜的に『日葡辞書』を中心資料として利用する。^{注12} 加えて『節用集』諸本から伊京集・明応五年本・天正十八年本・饅頭屋本・黒本本・易林本の六本を選んで援用する。また、三巻本『色葉字類抄』^{注13}も成立期以降の文献として参照する。これらの文献を資料として『博物館本の傍訓が和名抄諸本に本来なかった中世的要素を摂り入れている』事実を確認する(稿末に、本稿の目的に資する事例に限定して、当代の文献の記述を表にまとめた)。

3・2 No.1〜28はⅡ類、No.29〜60はⅤ類、No.61〜122はⅥ類の事例である。さらに、Ⅴ類は和名を二個もつ分類であるが、No.29〜46は第一の和名と、No.47〜60は第二の和名と傍訓が一致する事例である。とりわけ後者は第一の和名を採用しない点が目される。

全体をながめると、博物館本も和名抄の權威にある程度まで盲従している点は否定できない。また、成立期から改編期にかけて、対応する日本語に何らかの変化がもたらされた事例は、比率的に多いとは言えない。したがって、Ⅳ類【傍訓と和名が一致する】が大勢を占めるのは当然の結果である。筆者は、あえて權威に抗して改変を試みたⅡ・Ⅴ・Ⅵ類に所属する事例を見過すべきではないと考える。つきに、分類ごとに考察する。

Ⅱ類【傍訓があり、和名がない】について(No.1〜28)。「川(かは)」「人(ひと)」「子(こ)」「目(め)」「毫毛(け)」は、(a₁)〈対応する日本語が自明〉に該当する。これらは、その自明な日本語を傍訓として標示したもので、特に中世的要素は認められない(ただし、日葡辞書には記載がある)。一方、「海賊(かいぞく)」「鬢(びん)」「心(しん)」「頭風(づふう)」「癰(いよう)」「毬杖(ぎちやう)」「輪鼓(りうこ)」「鞆鼓(かつこ)」は、注目に値する。これらは、すべて日葡辞書に登録されており、節用集でも確認できる(「心」を除く)。したがって、成立期に字音語形が定着していなかったと断言できないが、改編期には日本語

として定着していたと考えられる。^{注14} このほか、「丹毒瘡(もへくさ)」は成立期の文献には見えないが、日葡辞書に現われる点から、改編期には存したものであろう。

Ⅴ類【傍訓と和名のいずれかが一致する】について。この分類は、No.29〜46の第一の和名と、No.47〜60の第二の和名と傍訓が一致する事例に区別される。前者は第一の和名を採用しており、權威に盲従したかに見えなくもないが、日葡辞書の記述と対照すると、No.38・39を除けば、第一の和名が日葡辞書に記載され、第二の和名が記載されないことから(「+」「+」「+」のパターン)、当代の生きた日本語を選択していることが確認できる。^{注15} 後者は上位の和名を採用しない(「+」「+」「+」のパターン)。ことに「父(ちち)」「母(はは)」は、上位の和名(「かぞ」「いろは」)を下位訓へと格下げしている点が興味深い。

Ⅵ類【傍訓と和名が一致しない】について(No.61〜122、「+」「+」「+」のパターン)。この分類には、誤写の考えられる事例もあるので、それらは除外する。^{注16}

(d₁)〈対応する日本語の形態に変化〉の事例は、「弦月(ゆみはりつき)」「織女(たなはた)」「昴星(すばるほし)」「颯(つじかせ)」「沼(ぬま)」「拇(をほゆび)」「女(たなはた)」「昂星(すばるほし)」「颯(つじかせ)」「沼(ぬま)」「拇(をほゆび)」などである。これらは、対応する日本語の中核的要素は不変であるが、形態的な変化(周辺の要素の添加/削除)が生じている。「弦月」「織女」「颯」「拇」の場合、日葡辞書は博物館本の傍訓のみを登載して、和名抄諸本の和名を掲げない事実が、それぞれの事例に形態変化が生じたことを象徴している。^{注17} 「黒子(はくろ)」は、「はくろ」から「ほくろ」へと形態が変化する中間段階で、中世的な語形と考えられる。「腫(はるゝ)」は、中世に確立した動詞終止形と連体形の同化に起因する事例と言える。

(d₂)〈対応する日本語が交替〉の事例は、和語から漢語への交替が多い。中世には、和語の古形が減んで、新たに漢語による新語が定着したと推測される。「肝(かん)」「脾(ひ)」「肺(はい)」「腎(じん)」「膽(たん)」「胃(い)」「瘵(れ)」「うが」などが典型的である。これらは和名抄諸本において、それぞれ「きも」

「よこし」ふくふくし「むらと」「い」「くそ(わた)ふくろ」かめはら」の和名を持つが、日葡辞書に記載があるのは「きも」と「い」のみで、逆に博物館本の傍訓が残らず掲載されている。

これまで、II・V・VI類の中から典型的な事例を抽出して概略を述べたが、さらに詳細な考察が必要となろう(本稿では、稿末の一覧表をもってそれに代えたい)。十分とはいえないが、以上の考察から、博物館本の傍訓が《和名抄諸本に本来なかった中世的要素を振り入れている》事実が、ある程度まで検証できたのではなからうか。

4 本稿では、博物館本の傍訓の中には、和名抄成立の時期には見られない中世的な色彩の強い日本語に改変された事例がしばしば存することを検証した。樋野(一九九三)では、博物館本の標出漢字列および註文にも何らかの改訂が行なわれたことを考証した。これらの事実を総合すると、以下のような推論が可能となる。

すなわち、榎英一(一九九二)は、博物館本が「十巻本から二十巻本への中間にある作業用草稿本」である可能性を主張する。その根拠は、博物館本が部門編成の面で十巻本と二十巻本の中間に位置する点、その両系統本の併存する箇所では註文が省略され、逆に二十巻本で増補された箇所では註文が存在する点である。

ここで、《作業用草稿本》の意味を明確にする必要がある。まず、博物館本は狭義の作業用草稿本ではありえない。なぜなら、博物館本は一五六六(永禄九)年に書写された伝本であるからである。したがって、榎英一の主張は、《博物館本は狭義の作業用草稿本を祖本とする》という理解にとどめるべきである。結局、十巻本から二十巻本への増補の立場をとれば、《博物館本は十巻本と二十巻本の中間段階に位置する》と等価である。ところが、筆者の考察により、博物館本が十巻本および二十巻本のいずれにも一致しない

要素(標出漢字列および傍訓)を内包する事実^{注18}は、榎英一の主張に矛盾するとせねばならない。

以上、標出漢字列・註文および傍訓にある程度まで改訂の手が加わっていることを述べてきた。それらの改訂がいつごろ行なわれたかが問題となるが、かりに標出漢字列・註文および傍訓が同時に改訂されたとすれば、その時期は中世以降である蓋然性が高い。

貴族社会の繁栄した古代に成立した『和名抄』も、中世という時代に遭遇して、実用を最優先に考えた『節用集』の形式への脱皮を志向したと理解される。

注

1 調査には、名古屋市博物館から公開された複製(名古屋博物館資料叢書二『和名類聚抄』一九九二年)を用いた。

2 本稿では《標出語》の術語は用いず、《標出漢字列》の術語を使用する。その理由は、和名抄の見出しとして掲げられた漢字列は、その註文にその漢字列全体に対応すると考えられる和名を持たず、かつ、その漢字列の一部分にのみ対応するとおぼしい和名を持つことがあるからである。つまり、中国語としてはいざしらず、日本語(漢語も含む)としての一語の(漢字)表記とは認められない例が存在すると考えるからである。和名抄は中国文献から採り求めた「本文」を掲げることが第一であったとすれば(山田健三(一九九二)による、8~14頁)、それが日本語として一語か否かはそれほど問題ではなかったといえよう。(樋野(一九九三)に同じ。)

3 本稿では、和名抄諸本において標出漢字列(その全体または一部分)に与えられた日本語(としての和訓)を《和名》と称する。したがって、「和名く」として掲げられた例のほか、「一云く」「俗云く」「此間云く」等として示された例も《和名》とする。(樋野(一九九五)に同じ。)

4 樋野(一九九三)で指摘した。

5 榎英一(一九九二)による推測(266頁)。

6 樋野(一九九五)で示した。

7 樋野(一九九五)で、調査範囲に分布する事例を分類ごとに提示した。ただし、IV類の事例は本稿にとって積極的な意義を持たないため割愛した。

本稿では、樋野(一九九三)と同様に博物館本の巻一から巻四までを対象とする。博物館本は二十巻本に準じた部門編成をとり、その巻一から巻四は、天地部一から音楽部九を掲載する。いわゆる十巻本・二十巻本ともに、それに対応する部門が存在する。標出漢字列の数は、六七二項で全体の約四分の一に相当する。

和名抄諸本は、十巻本系から箋注本を、二十巻本系から元和版を、両系諸本の代表として使用する。最初に、博物館本と元和版との標出漢字列の対応を決定するが、元和版に対応するそれが見出せない場合に箋注本を利用する。本稿では、元和版を基本資料、箋注本を補助資料として考察を進める。

8 和名抄諸本が和名を掲載しない事例について、濱田敦(一九六七)もほぼ同様の解釈を示している。

ところで、その「和名」を漢語にひきあてることが目的であったはずの本書に、実は、少からずその欠けている語が存在するのである。

……つまり、所謂「漢語」で、それが既に当時一般に、恐らく話し言葉としても、用いられる様になっていたものであるが、それらの多くは、大ざっぱに言えば、新しく中国から(或はそこを経由して)外来の文物が輸入された場合、それに当るべき和名の存在しないため、その名も漢字と共に採り入れられたというケースが圧倒的に多いと思われる。……その様な関係そのものは、日本にも古来存したはずであるが、その概念とそれを表現すべき語は、中国の文化と接触してはじめて日本の社会・日本語に成立したものである。(340・341頁)

9 これは(a₂)の条件に、さらに「(自明である)」という条件が加わったもの。

10 本稿では「死語」を「過去に用いられた単語で、ある時点で全く用いられなくなったもの」とする。個別には、死語ではあっても、理解可能なものと理解不能なものに分かれる。

11 ここでは、V類【傍訓と和名のいずれかが一致する】とVI類【傍訓と和名が一致しない】とをV・VI類【傍訓と和名(のいずれか)が一致しない】として一括する。

12 本稿(下)では、土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店刊、一九八〇年)を用いる。

13 三巻本『色葉字類抄』は前田本を利用し、欠落箇所は黒川本で補った。

14 「海賊(かいぞく)」は『土左日記』に用例があり、(b₁)「改編期までに字音語形が定着」には該当しない。

15 「孫むまご」「瘡(ひみ)」は、表記やマ／バ行音の交替の問題で、大目に見てよい事例と言える。

16 「雹(みぞれ)」「霞(あられ)」は、相互に漢字列と傍訓が入れ替わった事例。

17 「弦月(ゆみはりつき)」は、日葡辞書に連語的な「Camino yunifari. /Ximono yunifari.」は確認できるが、「ゆみはり」単独の形態は記されない。

18 十巻本および二十巻本のいずれにも一致しない要素としては、つぎの標出漢字列が和名抄諸本にはなく、博物館本に見出せる。

黄色石 (傍訓なし) (1―天地1―巖石5、9才4)

海嶋 シマ (1―天地1―江海7、9才9)

塗工 カヘマリ (2―人倫4―工商20、12才4) 色葉にあり

傀儡師 テク、ツ (2―人倫4―乞盜23、12ウ4)

後子 (傍訓なし) (2―親戚5―子孫27、13ウ5) 色葉にあり

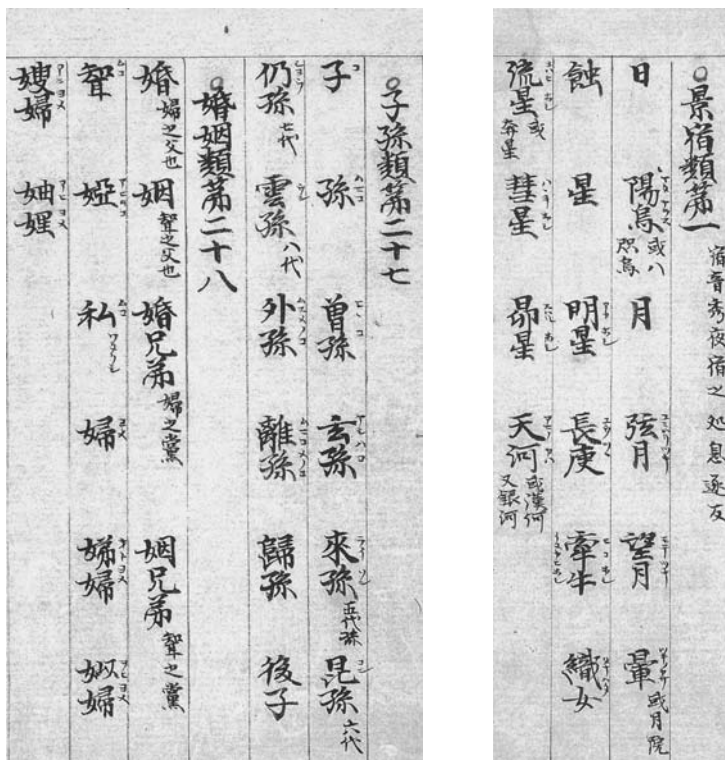
流鏑馬 ヤフサメ (4―術藝8―射藝42、18ウ6) 色葉にあり

琵琶 (傍訓なし) (4―音楽9―琴瑟47、19ウ9)

参考文献

- 濱田 敦(一九六七) 『和名類聚抄』(『本邦辞書史論叢』三省堂刊、一九八四年『日本語の史的研究』臨川書店刊に再び所収、本稿は後者による)
- 吉田金彦(一九七一) 『辞書の歴史』(阪倉篤義編『講座国語史3 語彙史』大修館書店刊)
- 榎 英一(一九九二) 解説(名古屋博物館資料叢書二『和名類聚抄』)
- 山田健三(一九九二) 順〈和名〉粗描(田島毓堂・丹羽一彌編『日本語論究』2 古典日本語と辞書』和泉書院刊)
- 樋野幸男(一九九三) 名古屋博物館本『和名類聚抄』の標出漢字列―および註文の性格(卷一〜四)―(『東海学園国語国文』44)
- (一九九五) 名古屋博物館本『和名類聚抄』の傍訓(上)(『富山大学教育学部紀要』47 A(文科系))

〔付記〕 本稿は、拙稿(一九九三)・(一九九五)とともに、名古屋博物館所蔵の『和名類聚抄』の文献的性格を探究するものである。拙稿(一九九五)は考察の資料を提示した。本稿はそれによって検証を試みた。



名古屋博物館本『和名類聚抄』(部分、左13丁裏・右8丁表、複製本による)

〈和名〉から〈傍訓〉へ―『日葡辞書』および当代の文献との比較―

【凡例】 「No.」＝通し番号。「所在1」＝博物館本の所在。「巻・部・門」＝博物館本の巻・部・門。「漢字列」＝博物館本の標出漢字列。「傍訓」＝博物館本の傍訓。「／」傍訓なし、「>」左傍訓、「>(～)」下部訓。「『和名抄』諸本の和名」＝元和版()は箋注本、{ }は元和版に同じの和名。複数の和名がある場合、順位を考慮し、上位の和名から順に記す(和名①>和名②)。順位づけの手がかりとなる字句を「」に示す(「和名～」は省略、それのないものは[])。「所在2」＝元和版()は箋注本の所在。「『日葡辞書』との比較および当代の文献の記述【備考】」＝最初に日葡辞書との比較を「傍訓/和名①>和名②」の順に、存在[+]/不在[-]で標示する(一部、日葡辞書の記述を挙げる)。つぎに節用集諸本および三巻本・色葉字類抄の記述を示す(同じ記述が二本以上に見出せる場合のみ「節用」と記す)。最後に備考を【】に記す。

No.	所在1	巻・部・門	漢字列	傍訓	『和名抄』諸本の和名	所在2	『日葡辞書』との比較および当代の文献の記述【備考】
1	976	1-天地1-水泉6	漣	ナミ/モシ	／(風吹水波成文曰漣…奈美)	1-14才 [1-45才]	[-] [+]
2	971	1-天地1-江海7	川	カハ	／(加波)	1-15才	[+] Caua.
3	1176	2-鬼神3-神靈16	土公	トクワ	／{ } }	2-2才	[-] 【土を司る神、日ボ「Tocu」ハ土貢(年貢)】
4	1176	2-人倫4-男女18	人	ヒト	／{ } }	2-5才	[+] Pito.
5	1176	2-人倫4-男女18	士	ヒト	／	2-5才	[+] Pito.
6	1271	2-人倫4-老幼19	師	シ	／{ }	[1-95才]	[+] Xi. 黒本「師」アリ 【箋注本】
7	1275	2-人倫4-左盜23	海賊	カイフク	／{ } }	2-12才	[+] Caizocu. 色葉・節用「海賊カヅク」アリ
8	1379	2-親戚5-兄弟26	母弟	ハマヒツノヲト	／{ } }	2-16才	[-] Notovolo. 【前項「母兄ハヒツノカミ」アリ】
9	1374	2-親戚5-子孫27	子	コ	／{ } }	2-17才	[+] Co.
10	1375	2-親戚5-子孫27	外孫	ムスメノコ	／{ } }	2-18才	[-] Musume.
11	1478	3-形體6-頭面30	膝	ホヘ	／{ } }	3-2才	[-] Fo. 色葉「類・膝ホヘ」節用「類ホヘ」アリ
12	1571	3-形體6-耳目31	目	メ	／{ } }	3-3才	[+] ME.
13	1578	3-形體6-毛髮33	毫毛	ケ	／{ } }	3-6才	[+] Re.
14	1578	3-形體6-毛髮33	鬢	ヒゲ	／{ } }	3-6才	[+] Bin. 節用「鬢ヒゲ」アリ
15	1579	3-形體6-毛髮33	鬚	ヒゲ	／{ } }	3-7才	[+] Figure.
16	1578	3-形體6-筋骨35	力	チカラ	／{ } }	3-9才	[+] Chicara.
17	1674	3-形體6-蔵府37	心	シン	／{ } }	3-11才	[+] Xin. (Xinno zō)
18	1678	3-病恙7-疾病40	頭風	ツツカ	／{ } }	3-17才	[+] Zzau. 易林「ツツカ」アリ
19	1773	3-病恙7-瘡瘡41	丹毒瘡	モヘクサ	／{ } }	3-24才	[+] Morecusa. 色葉・節用ナシ
20	1773	3-病恙7-瘡瘡41	疽	ソ	／{ } }	3-25才	[-] 易林「ソ」アリ
21	1773	3-病恙7-瘡瘡41	癰	イヨウ	／{ } }	3-25才	[+] Yo. 節用「ヨ」アリ
22	1776	3-病恙7-瘡瘡41	鬼貳頭	ラニエツリ	／{ } }	3-26才	[-] (Neburi.u.) 色葉・節用ナシ
23	1979	4-術藝8-雜藝具45	碁子	コイシ	／{ } }	4-7才	[-] Go. 色葉「コイ」アリ
24	1979	4-術藝8-雜藝具45	樽蒲采	チヨホサイ	／{ } }	4-7才	[-]
25	1979	4-術藝8-雜藝具45	毬杖	キチヤウ	／{ } }	4-8才	[+] Guichō. 節用「毬杖ギツチヤウ」アリ
26	1971	4-術藝8-雜藝具45	輪鼓	リウコ	／{ } }	4-8才	[+] Rūgo. 節用「流鼓リウ」アリ

27	1976	4-音楽9-鐘鼓46	鞆鼓	カヅコ	／〔 <i>u</i> 〕	4-97	[+]Cacco. 節用「カヅコ」リ
28	1978	4-音楽9-琴瑟47	琴	コト	／〔総〕古止乃乎〔 <i>u</i> 〕	4-107	[+]Coto. 節用「コト」リ
29	1071	1-天地1-田園10	園(園圃)	ソノ	曾乃>曾乃布〔一云〕	1-137	[+]Sono./[+]>[-]
30	1175	2-鬼神3-神靈16	電	イナヒカリ	伊奈比加利>伊奈豆流比〔一云〕>伊奈豆(萬)〔一云〕	2-27	[+]Inabicari./[+]>[-]>[+]Inazuma.
31	1178	2-鬼神3-神靈16	靈	ミタマ	美太(萬)日本紀云>美加介〔一云〕	2-47	[+]Mitama./[+]>[-] 【日ボ「Micaque, ヲ聖人の総像」意】
32	1176	2-人倫4-男女18	男	ヲノコ	乎乃古>萬須良乎〔萬葉集云〕	2-57	[+]Vonoco./[+]>[-] 【日ボ「Masurano, ヲ山びと」意、詩歌語】
33	1178	2-人倫4-男女18	乳母	メノ	女乃於止〔日本紀師説〕>米乃止	2-67	[+]Menoto./[-]>[+]>[+]
34	1272	2-人倫4-微賤22	渉人	ワタシモリ	和太之毛利>和太利毛利〔一云〕	2-117	[+]Watximori./[+]>[-]
35	1274	2-人倫4-乞盜23	巫覡	カンナキ	加牟奈岐>乎乃古加牟奈岐	2-117	[+]Cannagui./[+]>[-]Vonoco.
36	1379	2-親戚5-兄弟26	兄	コノカミ	古乃加美>伊呂櫛〔日本紀云〕	2-167	[+]Conocami./[+]>[-] 節用「コノカミ」リ
37	1374	2-親戚5-子孫27	孫	ムヤコ	無萬古>比古〔一云〕	2-177	[+]Mago./[-]>[-] 【日ボ「Fico, ヲ曾孫」意】
38	1472	2-親戚5-夫妻29	後夫	ヲハワ	宇波乎>伊萬乃乎止〔一云〕	2-207	[+]/[-]>[-]
39	1472	2-親戚5-夫妻29	前夫	シタワ	之太平>毛止乃乎止古〔一云〕	2-207	[+]/[-]>[-]
40	1473	2-親戚5-夫妻29	妻	メ	米>米阿波須〔一云〕	2-207	[+]Me./[+]>[-]
41	1477	3-形體6-頭面30	頬	ツラ	豆良>保々〔一云〕	3-27	[+]Tcura./[+]>[-]Fo. 節用「面・頬ツラ」類例「リ」
42	1677	3-形體6-手足38	掌	タナコハロ	太奈古々呂>太奈曾古〔一云〕	3-127	[+]Tanagocoro./[+]>[-] 節用「タナコハロ」リ
43	1677	3-形體6-手足38	指	ユヒ	由比>於興比〔俗云〕	3-137	[+]Yubi./[+]>[-] 節用「指ユヒ」・「拇ユヒ」・「易木」・「拇ユヒ」リ
44	1772	3-病恙7-疾病40	嘔吐	ヘトツク	倍止都久口>太萬比〔文〕	3-197	[+]Fedou toqu./[-]>[-]
45	1776	3-病恙7-疾病40	疳	アタハラ	阿太波良口>之良太美〔一云〕	3-217	[+]Atabara./[+]>[-]
46	1778	3-病恙7-瘡疥41	疥	ヒミ	比美>之毛久知〔辨色立成云〕	3-277	[+]Fibi./[-]>[-]
47	875	1-天地1-風雪3	暴風	ノクシノカセ	八夜知>乃和木乃加世〔又〕〔漢鈔云〕	1-57	[+]Nouaqi./[-]Fayate.>[-] 節用「ノクシノカセ」リ・「ハチ」リ
48	976	1-天地1-水泉6	氷	コホリ	比>古保利〔文〕	1-147	[+]Couoni./[-]>[+] 節用「ホリ」リ
49	1271	2-人倫4-微賤22	人民	ヲホシタカラ	比止久佐>於保太加良〔一云〕	2-107	[+]Tacara./[-]>[-] 【日ボ「Filocusa, ヲ一種ノ意】
50	1373	2-親戚5-父母24	父	チハ>(ウソ)	加曾口>知々〔俗云一〕	2-147	[+]/[-]>[+] 【日ボ「Cazoito, ヲ父と母ノ意、詩歌語】
51	1373	2-親戚5-父母24	母	ハハ>(イロハ)	伊呂波口>波々〔俗云一〕	2-147	[+]/[-]>[+] 【同上】
52	1472	2-親戚5-夫妻29	夫	ヲトコ	乎乎止>乎止古〔一云〕	2-207	[+]/[-]Voito.>[-] 節用「男・夫ヲトコ」・「夫ヲツ」・「饅頭」
							【日ボ「Vooco, ヲ成年男子ノ意」】
53	1678	3-形體6-手足38	腕	ウデ	太々無岐>宇天〔一云〕	3-137	[+]Vde./[-]>[+]
54	1671	3-形體6-手足38	踝	ツツシ	豆不奈岐>豆布々之〔俗云〕	3-147	[+]Tsububuxi./[-]>[+] 節用「ツツシ」リ 【日ボニ他2形「リ」】
55	1775	3-病恙7-疾病40	腫	ユヒ	於賣阿志(辨色立成云)>古比〔此間云〕	3-217	[+]Cohi./[-]>[-] 節用「喉痺ユヒ」リ・「オアシ」リ
56	1775	3-病恙7-疾病40	蹇	ナヘク	阿之奈閑(訓)>那閑久〔此間云〕	3-217	[+]Naye.uuu./[+]Axinaye.>[-]
57	1778	3-病恙7-疾病40	癡狂	モノカルイ	太布流(訓)>モ乃久流比〔俗云〕	3-237	[+]Monogaurui./[-]>[+] 節用「モノカル」リ
58	1775	3-病恙7-瘡疥41	眈目	イヌメ	以比保>以乎女〔文〕	3-267	[+]/[-]Ibo. (ymorai.)>[-] 節用「イホ・イヌ」リ・「イナ」リ
59	1976	4-音楽9-鐘鼓46	腰鼓	クレツヒミ	三乃豆々美〔俗云〕>久禮豆々美〔讀〕	4-107	[+]/[-]>[-]

60	1979	4-音楽9-琴瑟47	篋篋	クラコト	江胡二音〔俗云如〕>久太良古止	4-12才	[=]/[-]>[-]
61	846	1-天地1-景宿1	弦月	ユミハツキ	由美人利〔〕	1-1才	[+]/[-]Camino yumiari. Ximono yumiari. 節用「ユミハツキ」 【日ボ「ユミハ」単独形ナシ】
62	846	1-天地1-景宿1	暈	ツキリカサ	加左〔此間云日月〕	1-2才	[+]/[+] 【日ボ「カサ」単独形ナシ】
63	847	1-天地1-景宿1	織女	タナハタ	太奈人太豆女〔〕	1-2才	[+] 【日ボ「Xocugio. Vorilme.」絹織りの女「星」】
64	848	1-天地1-景宿1	昴星	スハルホシ	須八流〔〕	1-3才	[+] 【Subaruhoxi. / [+]Subaru.】
65	872	1-天地1-雲雨2	霖	ナカメ	奈加阿女〔〕	1-4才	[+] 【Nagaame. 節用「ナカメ」ナリ】
66	872	1-天地1-雲雨2	霈	ヒチサメ	比丘女〔日本私記云火雨〕>比布留〔俗云〕	1-4才	[+] 【-]/[-]>[-]
67	872	1-天地1-雲雨2	霽	アサシタリ	阿萬之太利〔〕	1-4才	[+] 【Xitadani. / [-]Xidare, ruru, eta. 節用「霽アサリ」ナリ】
68	875	1-天地1-風雪3	飄	ツシカセ	豆無之加世〔〕	1-5才	[+] 【+] 【Toujicake. / [-] 節用「ツシカセ」ナリ】
69	876	1-天地1-風雪3	雹	ミソレ	安良禮〔〕	1-6才	[+] 【Mizore. / [+] 明応「霰アサリ」霰・雨雪・霰ソレ、易林「霰・霰アサリ」雨雪・霰ソレ】 【節用集諸本二異同ナリ】
70	876	1-天地1-風雪3	霰	アサレ	美曾禮〔〕	1-6才	[+] 【Aare. / [+] 同上】
71	971	1-天地1-江海7	沼	ヌマ	奴〔〕	1-16才	[+] 【Nuna. / [-] 節用「ヌマ」ナリ、色葉「ヌマ」ナリ】
72	979	1-天地1-田園10	粟田	アハタ	安八〔日本私記云ー〕〔〕	1-12才	[+] 【AV.A. / [-] 色葉「アハタ・アハタ」ナリ】
73	1043	1-天地1-塵土11	糞糞堆	アカタ	阿久太布〔辨色立成云〕〔〕	1-13才	[+] 【+] 【Acuta. / [-] 節用「アカタ」ナリ】
74	1147	2-鬼神3-神靈16	稻魂	ウカスター	宇介乃美太萬>宇加乃美太萬〔俗云〕	2-3才	[+] 【-]/[-]Mitama. > [-]
75	1241	2-人倫4-老幼19	朋友	トモ	〔止毛太知〕	1-96才	[+] 【+]/[+] 【Tomotomo. 節用「トモ」ナリ】
76	1244	2-人倫4-工商20	陶者	スヘモツクリ	須惠毛乃豆久流〔訓〕〔〕	2-9才	[+] 【-]/[-]
77	1241	2-人倫4-微賤22	邊鄙	アツサウト	阿豆萬豆〔訓〕〔〕	2-10才	[+] 【Azzuma. / [-] 色葉「アツサウト・アツサウト」ナリ】
78	1242	2-人倫4-微賤22	蕩子	ハタレヲ	〔太波禮平漢語抄云ー〕	1-106才	[+] 【-]/[-]Tatare. 【ハタレヲ」誤写ナリ】
79	1342	2-親戚5-父母24	祖姑	ヲホムハ	於保於波〔於保乎波〕	2-14才 1-113才	[+] 【-]/[-]Yoba.
80	1345	2-親戚5-子孫27	離系	ムヤコノコ	無萬古乎比男〕>無萬古女比女〕	2-18才	[+] 【-]/[-]>[-]
81	1348	2-親戚5-婚姻28	娼婦	ヲヒヨメ	於保興女〔〕	2-19才	[+] 【+] 【Voioyome. / [-]
82	1447	3-形體6-頭面30	雲脂	イロコ>〔カミノアカ〕	加之良乃安加>伊呂古〔ー云〕	3-2才	[+] 【-]/[-]JACA. > [-] 節用「雲脂イロコ」ナリ 【日ボ「Iroco.」魚の鱗ノ意】
83	1447	3-形體6-頭面30	顔〔顔面〕	カホ	〔訓典面同〕>加保波世〔面子師説〕>保々豆岐〔ー云〕	3-2才	[+] 【+] 【Cano. / [+]Caubaxe. > [-]F6. 色葉「カホ・カホハテ」易林「カホハテ」ナリ、和名抄「カホ」ナリ】
84	1546	3-形體6-鼻口32	咽喉	ノド	乃無止〔〕	3-6才	[+] 【+] 【Nodo. / [-] 節用「ノド」天正「ノド」ナリ】
85	1546	3-形體6-鼻口32	吭	ノドノヘ	〔訓上同〕>乃無止布江〔俗云〕〔〕	3-6才	[+] 【+] 【Nodobue. / [-]
86	1544	3-形體6-肢體34	臂	シリタムラ	〔尻〕之利>〔臂〕井佐良比〔俗云〕	3-9才	[+] 【-]/[+] 【Xiri. > [-] 色葉「シリタムラ」桂本「シリタ・シリタ」ナリ】
87	1644	3-形體6-蔵府37	肝	カン	岐毛〔〕	3-11才	[+] 【+] 【Can. (Canno. > [-]Qimo.】
88	1644	3-形體6-蔵府37	脾	ヒ	興古之〔〕	3-11才	[+] 【+] 【Fi. (Fino. > [-]
89	1644	3-形體6-蔵府37	肺	ハイ	布久不久之〔〕	3-11才	[+] 【+] 【Fai. (Faino. > [-]
90	1644	3-形體6-蔵府37	腎	シン	無良止〔〕	3-12才	[+] 【+] 【lin. (limozo. > [-] 節用「腎シン」ナリ】

91	1644	3-形體6- 藏府37	大腸	ヲホハラハタ	波良和太〔 <i>u</i> 〕	3-124	[+] <i>Daichō</i> , [+] <i>Farauata</i> , 節用「腸ハツカ」 <i>リ</i>
92	1645	3-形體6- 藏府37	小腸	ホノハラハタ	保曾和太〔 <i>u</i> 〕	3-124	[+] <i>Xochō</i> , [-] 節用「ツカ」 <i>リ</i>
93	1645	3-形體6- 藏府37	膽	タシ	伊〔 <i>u</i> 〕	3-124	[+] <i>Tan</i> , [+] <i>l</i> .
94	1645	3-形體6- 藏府37	胃	イナツツカ	久曾和太布久呂〔久曾布久路〕	3-124 [2-374]	[+] <i>l</i> . (no <u>fu</u>), [-] 節用「胃ツツカ」 <i>ホ・キ・リ</i>
95	1647	3-形體6- 手足38	膈	テノアラナ	天乃阿夜〔 <i>u</i> 〕	3-134	[+] <i>l</i> , [-] 【膈ノ指紋「テノアラ」誤写カ】
96	1647	3-形體6- 手足38	拇	ヲホユヒ	於保於與比〔 <i>u</i> 〕	3-134	[+] <i>Yōyubi</i> , [-] 明心「拇ヲユヒ」, 天正・黒本「拇ヲユヒ」, 易林「拇ヲユヒ」, 節用「指ヲユヒ」 <i>リ</i>
97	1648	3-形體6- 手足38	食指	ヒトサシユヒ	比止佐之乃指〔楊氏漢語抄云頭指〕	3-134	[+] <i>Fitosaxiyubi</i> , [-]
98	1648	3-形體6- 手足38	中指	ナカノユヒ	奈加乃於與比〔 <i>u</i> 〕	3-137	[+] <i>Yubi</i> , [-]
99	1648	3-形體6- 手足38	無名指	ナシユヒ	奈々之乃指	3-137	[+] <i>l</i> , [-] <i>Bunneino yubi</i> , <i>Cusuxiyubi</i> , <i>Cusuniyubi</i> .
100	1648	3-形體6- 手足38	季指	ユキヒ	古於與比〔 <i>u</i> 〕	3-137	[+] <i>Coyubi</i> , [-] 易林「季指ユキヒ」 <i>リ</i>
101	1644	3-形體6- 莖垂39	屁	ヘ	倍比流〔楊氏漢語抄云放屁〕〔 <i>u</i> 〕	3-167	[+] <i>Fe</i> , [-] <i>Fefiri</i> , <i>Feto firu</i> , 節用「屁」 <i>リ</i>
102	1649	3-病恙7- 疾病40	腫	タレメ	多々良女〔師説〕〔 <i>u</i> 〕	3-174	[+] <i>Radareme</i> , [-] 天正「タレメ」 <i>リ</i>
103	1649	3-病恙7- 疾病40	眩	メクルメ	女久流女久夜萬比〔 <i>u</i> 〕	3-184	[+] <i>Mecurumecu</i> , [-] <i>Qenun</i> , 節用「クルメ」 <i>リ</i>
104	1741	3-病恙7- 疾病40	瘡腫	ヲシ	於布之〔 <i>u</i> 〕	3-184	[+] <i>Voxt</i> , [-] 節用「瘡ヲシ」 <i>リ</i>
105	1741	3-病恙7- 疾病40	咽喉	クチユカミ	久知由賀無〔 <i>u</i> 〕	3-187	[+] <i>l</i> , [-] 伊京「クチユカミ」 <i>リ</i>
106	1743	3-病恙7- 疾病40	喉痺	コヒ	古比〔俗訓云〕〔 <i>u</i> 〕	3-197	[+] <i>Coft</i> , [-] 節用「コヒ」 <i>リ</i>
107	1745	3-病恙7- 疾病40	癰疽	テウカ	加女波良〔師傳云〕〔 <i>u</i> 〕	3-217	[+] <i>Choga</i> , [-] 節用「テウカ」 <i>リ</i>
108	1746	3-病恙7- 疾病40	瘰癧	ハラツケ	波良不久流〔 <i>u</i> 〕	3-224	[+] <i>l</i> , [-] 易林「瘰ハラツケ」 <i>リ</i>
109	1746	3-病恙7- 疾病40	痔	チ	知乃夜萬比〔 <i>u</i> 〕	3-224	[+] <i>Gi</i> , [-] > [-] 節用「痔チ」, 伊京「尻病ツリ」 <i>リ</i>
110	1747	3-病恙7- 疾病40	痢	クシヒルヤベヒ	久曾比理乃夜萬比〔 <i>u</i> 〕	3-224	[+] <i>l</i> , [-]
111	1749	3-病恙7- 疾病40	痢瘍	セウカチ	加知乃也萬比〔俗云〕〔 <i>u</i> 〕	3-237	[+] <i>Xocat</i> , [-] 節用「セウカチ」 <i>リ</i>
112	1749	3-病恙7- 疾病40	黃疸	キヤベヒ	岐波無夜萬比〔 <i>u</i> 〕	3-244	[+] <i>l</i> , [-] <i>Qibani</i> , <i>u</i> .
113	1741	3-病恙7- 疾病40	苦訟	フナヤベイ	布奈夜毛非〔 <i>u</i> 〕	3-244	[+] <i>l</i> , [-]
114	1746	3-病恙7- 瘡瘡41	熱沸瘡	アセホ	阿世毛〔 <i>u</i> 〕	3-274	[+] <i>Axobo</i> , [-] 節用「アセホ」 <i>リ</i>
115	1748	3-病恙7- 瘡瘡41	黒子	ハノクロ	波々久曾〔 <i>u</i> 〕	3-274	[+] <i>Focuro</i> , [-] 易林「ハノクロ」, 天正「ホクロ」 <i>リ</i>
116	1749	3-病恙7- 瘡瘡41	腫	ハルハ	波留〔 <i>u</i> 〕	3-287	[+] <i>Fare</i> , <i>uru</i> , <i>eta</i> , [-] 節用「ハルハ」 <i>リ</i>
117	1845	4-術藝8- 射藝42	騎射	リユミ>(ムヤミ)	宇末由美〔楊氏漢語抄云馬射〕〔 <i>u</i> 〕	4-14	[+] <i>l</i> , [-] 色葉・伊京「賭弓リユミ」, 色葉「騎射ウヤミ」 <i>リ</i>
118	1942	4-術藝8- 射藝具43	射垛	アツチ	以久波止古路〔楊氏漢語抄云〕阿無豆知〔世間云〕	4-34	[+] <i>Azzuchi</i> , [-] > [-] 節用「アツチ」 <i>リ</i>
119	1944	4-術藝8- 雜藝44	打毬	ウチマリ	萬利字知〔師説云〕〔 <i>u</i> 〕	4-44	[+] <i>Mari</i> , [-] 色葉・節用「ウチマリ」 <i>リ</i>
120	1944	4-術藝8- 雜藝44	蹴鞠	マリ	米利古由〔世間云〕〔 <i>u</i> 〕	4-44	[+] <i>Mari</i> , [-] 節用「蹴マリ」 <i>リ</i>
121	1947	4-術藝8- 雜藝44	拍浮	ウツシ	於布須〔俗云〕〔 <i>u</i> 〕	4-74	[+] <i>l</i> , [-] 色葉「拍浮ウツス」 <i>リ</i>
122	1941	4-術藝8- 雜藝具45	獨樂	コヤツツリ	古末都玖利〔 <i>u</i> 〕	4-84	[+] <i>l</i> , [-] 色葉「コヤツツリ」 <i>リ</i> , 節用「コヤツツリ」 <i>リ</i>